

《公開講演会記録》

辛亥革命と近代中国

——未来を示唆するもの

ノンフィクション作家 譚璐美



孫文という人

私は今春、『日中百年の群像 革命はまだ成らず』という一書を執筆いたしました。歴史そのものというより、人間そのものに興味があり、その時代に生きた人々がなにを考え、どう行動したのかについて語った群像劇です。

「革命はまだ成らず」という言葉は、孫文が亡くなる直前に同志たちに残した遺言ですが、孫文という人は、つくづく魅力的な人だったと思います。

はじめて日本へ亡命した時、日本の政治家、犬養毅に「趣味はなにか」と問われて、即座に「革命です」と応じました。「いや、それは趣味ではないでしょう。」

もっと個人的に好きなことは何か？」と、重ねて聞かれると、急に顔を赤らめてモジモジして、「ウーマン」と答えたので、満座の人たちから歓声が沸いたというエピソードが残っています。孫文の趣味は、「第1に女性、第2に読書、第3に革命」に落ち着いたという話です。

女性に関しては、知的で美しい富豪の娘でアメリカ留学帰りの宋慶齡を見初めた途端、親の決めた妻を広東から東京へ呼び寄せて協議離婚し、直後に再婚しましたが、その前に横浜とハワイにも恋仲になった女性がいいて、子どもももうけていましたから、やはり「第1の趣味」なのでしょう。「第2」に挙げた読書は、暇さえあれば書斎に閉じこもり、ナポレオンの伝記だけで10種類も耽読し、海戦

図に没頭して戦略を練ったというほどの熱中ぶりです。

私が興味を引かれたのは「第3」です。孫文が10回も革命に失敗したにもかかわらず、ちっともめげていないのです。そして11回目の武昌蜂起で遂に辛亥革命を成功させた話は有名です。その持久力と精神力はいったいどこから生まれたものなのでしょう。その点が私にはずっと不思議でならなかったのですが、なるほど「革命が趣味」だと即答するほど好きなのならば、大いに腑に落ちるというものです。

とはいえ、11回目の武昌蜂起の成功は、決して孫文の手柄ではありませんでした。博識で真面目な理論家であった宋教仁という革命家が、孫文の失敗に嫌気がさし



孫文

て別派で行動を起こし、その戦略が的中した結果でした。「中国版・西郷隆盛」と呼ばれた生真面目な豪傑、黄興の勇敢な戦いぶりと指導力にも負うところが大きかったのです。他にも、辛亥革命の時代には個性豊かで情熱的な男たち（と女たち）が大勢いて、中国ばかりか世界中を駆け巡りつつ戦う姿は「天空海闊」——天高く、海は限りなく広く、縦横無尽に翔けるが如くに活躍するさま——と表現するのにぴったりです。彼らは信義に厚く、人生を意気に感じ、どん底生活を愉快に生き抜きました。そんな人間味溢れる姿はまるで隣のおじさんの話にも似て、とても身近な存在として感じられますし、錯綜する人間模様はあたかも『三国志』か『水滸伝』のような血湧き肉踊るストーリーです。それらを余すところなく読者

にお伝えしたくて、私は本書を執筆しました。

辛亥革命と現代

歴史とは、綾織の布地のようなもので、同時代に生きた人々の個性がぶつかり合い、切磋琢磨して作用しあった末に、生み出された事柄の集大成です。遠目に見れば、鮮やかな時代の色調がうかびあがりますが、近くによつて見つめてみると、そこには個人個人の個性の違いや、偶然の結果引き起こされた事件や事柄が積み重なっているのだと気付かされます。

そして本書を書き上げた後、あることに気がつきました。辛亥革命の時代には、現代と酷似する社会状況や経済問題が横たわっていることに、ハタと思い当たったのです。辛亥革命の時代を眺めることは、今日の世界的不況や国際的な難局を解決する上で、大きなヒントを与えてくれているのではないかと思うのです。

孫文が最初に起こした武装蜂起は1895年の広東でした。日清戦争が終わった年のことです。失業者ややくざ、強盗、村の自警団などを総動員し、まず広東省を独立させ、勢いに乗って全国を制覇して、清朝支配から脱しようという計画で

した。それが失敗して指名手配を受けた孫文は世界中を逃げ回りながら、続けざまに10回もの武装蜂起を計画し、ついに1911年、辛亥の年の10月に武昌で起こった武装蜂起が成功しました。武昌は今の湖北省武漢市の長江南岸です。武装蜂起軍は勝利宣言を全国に向けて発し、それに応じた11省が次々に独立を宣言して、ついに清朝政府の崩壊を招くに至ったのです。

革命が成功した後に孫文は「英雄」として祭りあげられますが、こと此処にいたるまでの彼は「指名手配犯」ですし、行なった武装蜂起は、今でいう「爆弾テロ事件」ですし、「暴動」です。つまり、物事にはすべて裏表の表現があるものなのです。

中国では、最近しばしば出稼ぎ労働者たちの暴動が発生しています。

直近では、2012年6月25日、広東省中山県で出稼ぎ労働者の子どもと地元の子どもの喧嘩に大人が肩を持ち、大規模な暴動に発展しています。原因は、経済成長に伴う貧富の格差があるといわれていますが、原因はそれだけでしょうか。

もともと広東という土地柄は「革命の策源地」とも呼ばれ、歴史的事件や事柄の多くが、最初にこの地から始まっている



武昌蜂起

ます。孫文ばかりでなく、清朝時代の改革派のリーダーだった康有為とその弟子の梁啓超、無政府主義者の劉師復らも広東省出身です。「敢想、敢説、敢作」（やる気があり、考えたことをすぐに口に出し、果敢に行動する）という、進取の気性が広東人気質の特色だといえます。そして中国では、斬新な出来事はいつも決まって広東から始まっているのです。



革命戦争

小さな事件や新しい事柄が発生して全国に波及し、やがて「火の海」となって燃え広がり、次の時代を生み出すことになります。それが中国の歴史です。それを今一度思い起こす必要があります。百年前の辛亥革命前夜の様子は、まさに現代と重なる部分がたくさんあります。第1に、治安の悪化と社会不安。失業者の増加、そして生活苦です。1900年の義和団事件で敗北した清朝政府は、世界14カ国へ多額の賠償金を支払うハメ

になり、清朝の国家財政は破たんしました。

第2に、人々の精神状態は空虚感にさいなまれ、不安がいっぱいでした。現代は経済成長が進んでいますが、将来の方向性が見通せない中国では、企業家は目標を探しあぐねて困惑しています。山岡荘八の小説『徳川家康』がベストセラーになっていますが、企業家たちが徳川家康の地道な努力と国難に立ち向かうひたむきな姿に感動し、自分の生きるモデルにしようとしているためだと考えられています。市民の中には宗教にのめりこむ人も増加しています。ある統計では、「家庭教会」と呼ばれる中国政府非公認の地下キリスト教会の信者が7千万人にも達しているとされ、世界最大の政党である中国共産党の党員数にも匹敵するくらいなのです。

そして第3に、「民度」の問題があります。「民度」とは、市民に公共心が備わっているかどうかと考えてよいでしょう。水に溺れかかっている友人を助けてほしいという高校生に、「助けたら金をいくら出すか？」と聞いたという話や、交通事故にあった幼児が道端に倒れているのに、横を通りかかった車や人々がだれも助けず、数10分も放置されたという



陳光誠

衝撃的なニュースがありました。

最近では、山東省に住む盲目の人権活動家の陳光誠氏が、地方役人から暴行を受け、役人から金で雇われた村人たちが数百人に監視され、自宅軟禁されていた事件がありました。陳光誠氏は自力で自宅から脱出し、支援者に助けられて北京のアメリカ大使館へ保護されました。ちょうどアメリカのヒラリー・クリントン国務長官が公式訪中する時期であったことで、世界的に報道されて注目が集まりました。米中両国政府は、陳光誠氏をアメリカへ留学させることで、早期に決着が図られました。

陳光誠氏はアメリカへ到着後、ニューヨーク大学（NYU）に入学しましたが、彼の留学を受け入れた同大学の法学部教授のジェローム・コーエン氏に、私はイ

ンタビューする機会を得ました。コーエン教授は、1979年の米中国交樹立直後、周恩来首相の晩餐会に招待されて両国の未来永劫の親善を託されたとのことで、ハーバード大学のフルブライト教授やフェア・バンク教授、ジャーナリストのエドガー・スノー氏など、一世を風靡したアメリカの代表的文化人とも親しい「中国通」のひとりですが、陳光誠氏は数年前から知り合いで、「裸足の弁護士」と呼ばれて、弁護士知識を独学した市井の人、陳光誠氏の正義感と勇氣に惚れこみ、法律知識の指南役にもなってきた人です。

そのコーエン教授は、中国の現状についてこう語っています。

「中国では最近、刑事訴訟法ができました。今後もう少し法が整備していけば、中国も少しずつ良くなっていくでしょう」。

陳光誠氏も、「中国にも法律がないのではない。あるのです。問題は、法律を実行していないことなのです」と言っています。

「法律はあるのに、実行しない」——それが、現代中国の大きな問題点なのです。さて、百年前に孫文は中国の発展段階について、こう区分しています。



広東省の暴動

「軍政・訓政・憲政」——「軍政」とは、軍事政治です。「訓政」とは、実行力のある指導者による権力集中の政治です。「憲政」とは、法律に基づく国家運営です。この3つの段階を踏んで後、中国はじめて近代化するというのです。

孫文が起こした辛亥革命は武装闘争で軍事政治です。それが成功して中華民国臨時政府を設立すると、孫文は最高統率者として「臨時大總統」の地位につきました。つまり「訓政」です。そして実施したのは、「憲法」の制定と「議會」の創設でした。速やかに「憲政」を軌道に

乗せようとしたのです。しかし、孫文の試みは「帝政」を志向する袁世凱の目論みの前に、あえなく崩れ去りました。それでも孫文はめげずに、その後、3度も広東省で自前の政府を作り直して理想的な政策実施を試みました。

21世紀の今日、孫文の言う3つの発展段階のうち、中国は果たしてどの段階にあるのでしょうか。共産革命という「軍政」があり、評価は分かれるものの、毛沢東という「訓政」の時代がありました。今日では憲法や法律はあるものの、実行されていないという問題が指摘されています。ということは、まだ「憲政」には移行できていない時代なのだと言わざるを得ません。

嘉納治五郎の役割

もう一つ、私には重要だと思うことがあります。「第3」に提示した「民度」の問題です。

先ほどご紹介したように、日本人には理解しえないほど残酷な事件や事故が、しばしば中国で発生しています。その原因のひとつに「民度」の問題があると私には思えてなりません。

では、どのようにしたら「民度」を向



嘉納治五郎

上させることができるのでしょうか。

中国の「民度」について、最初に着目した日本人は、講道館を創設した嘉納治五郎です。彼は中国人の民度を上げるためには、速やかに初等教育を普及させるべきだと百年前に説いています。

嘉納治五郎は、日清戦争直後の1896年、駐日清国公使の依頼を受けた文部大臣兼外務大臣の西園寺公望に委託されて、13名の清国留学生を教育するために、神田の一軒家を借りて「亦楽書院」を開設しました。当時の嘉納は高等師範学校を設立して校長の任にありましたが、西園寺公望からとても信頼されていました。間もなく、清国留学生が急増したため、嘉納は「亦楽書院」を発展的に解消して、1902年（明治35年）、正式に清国留学生のための教育機関「弘文学院」「1

906年（明治39年）に「宏文学院」と改称」を発足させました。

その「弘（宏）文学院」の開設直前の1902年、嘉納は清国の教育を視察しました。『勸学篇』を書いたことで知られる開明派の湖広総督、張之洞に招かれた旅でした。そして帰国後、嘉納は「弘文学院」の第1期生の卒業式で講演して、清国視察の感想を次ぎのように述べました。

「日本に居りて之（清国）を見るときは、彼国今日の實際は、世人が日本に居りて考ふるが如き刷新の機運に際せるものに非ず。……清国は広大な邦土にして、幾多の省に分割せるが故に……各省に就て之を觀るときは、各省の内に改革刷新の必要を認むる機運充滿せるにはあらざるなり。或いは漠然として革新の必要を感じながらも、なお世界の大勢に暗きものも少なからず」

つまり、隣国の清国は近代化の黎明期にあり、清国政府も積極的に改革に取り組んでいるので、全国に改革機運が満ち満ちているのかと思いきや、地方へ行けばもっともそんなことはない、と言うのです。

そして嘉納はこう主張します。「現在の清国に最も必要なものは、小学校の初



魯迅

等教育を普及させるために、師範学校を速やかに開設して教師の養成を行い、国民全体の民度を向上させて国家の隆盛をはかることにある。私利私欲を棄てて『公理』を養うことこそ、国民教育の根本である。だが、清国の実情は『読書人』と『一般人』との教養の差が甚だしく、いかに聖人君子であっても、通俗的な方法を講じなければ国民一般の徳性には寄与しない」

さらに、こうも言いました。「国民は国家の『強力』（強権）に服してはならないが、『公理』には服さねばならない。『公理』とは、集団や社会の利益のために公德をもって追求することである」

ちなみに、弘文学院の第1期生には、後の文豪・魯迅もいました。卒業後、魯迅は仙台の東北医学専門学校に入学しま

すが、やがて国民を救済するには、医学によって身体的苦痛を和らげることを目指すよりも、文学によって精神面から国民に警鐘を鳴らし、国家の危機的状況を自覚させたいと決意して、人生の方針を転換します。思えば、魯迅の終生の文学活動の根底にあるのは、嘉納治五郎が説いた「民度の向上」という主張と通じるところがあつたのではないかと感じています。

ちなみに、「弘文学院」は、1909年の閉鎖までに総勢7千名の中国人留学生に近代化教育を施して、清朝政府の改革政策に大いに寄与しました。しかし運命の皮肉か、その後、大正期になって日本に流入しはじめた各種新思想の洗礼を受けた留学生たちは、社会改革の熱気に煽られて「覚醒」し、嘉納が期待していたような清朝政府を底支えする従順で有能な人材になることを拒否して、こぞって辛亥革命へと突き進んでいきました。そして清朝政府は崩壊するに至ったのです。

それにしても、百年も前に嘉納治五郎が主張した「民度の向上」という中国教育論が、現代でもそっくりそのまま当てはまり、急務になっていると考えられるのは、なんと皮肉なことでしょうか。

エリート主義と民度

振り返れば、中国では百年このかた、「民度の向上」を図る教育が施されたことはありません。その代わりに実施されてきたのは、為政者に必要な人材を養成するためのエリート教育です。それと為政者に都合の良い国民教育です。

国家財政が逼迫していた20世紀初頭には、近代化のためには限りある資金で人材を養成することが急務とされ、アメリカから義和団事件の賠償金が返還されると、アメリカの強い要望でアメリカ留学のための資金として活用されました。北京に留学準備の事務所を開設して、多くの優秀な人材をアメリカへ送り込む準備が整いました。間もなく「清華学堂」が開設されて、留学直前の準備教育を行なうようになりました。現在、中国で有数の最高学府として知られる清華大学は、この「清華学堂」が元になっています。アメリカ式のエリート教育は、科挙にみられるような中国伝統の教育方法とも相まって、中国に深く浸透して継続されて、今日まで営々と「少数精鋭主義」がまかり通ってきたのです。

その半面、一般市民に基礎知識を教え



清華大学

るための初等教育はなおざりにされてきました。中華人民共和国が成立して後も、長引く政治的混乱の中で、重視されたのは共產主義を重んじる思想教育であったために、政治に強い関心を持つ人々を育成しましたが、普遍的な公共心を養うための社会教育はなされないままでした。そもそも「公共」という概念そのものが存在しなかったのですから、仕方のないことだと言えるかも知れませんが。

今日の中国では、経済成長を成し遂げて余裕の生まれた財政資金を投入して、初等教育は全国にほぼ普及しました。しかし嘉納治五郎が言う「公理」、つまり社会性や公共心を養う教育はまだまだ定着するほどには時間が経っていません。また、今日でも、中国政府の「強力」（強権）に服従するような教育方針がとられ、ネット封鎖など、世界の情報から国民の耳目を遮断しているのも事実です。今も重要視される「少数精鋭主義」によって、「読書人」である現代のエリートと一般庶民との教養格差、経済格差は広がり、「民度」の低い国民を大量に再生産しつづける結果にも繋がっています。考えてみればわかることですが、今の時代に少数精鋭主義ではもう中国という巨大国家は立ち行きません。ここで改めて嘉納治五郎が提唱するような「日本流の普及教育」を推進して、広く一般国民に公共心を養う教育を施せば、きっと国民の「民度」が飛躍的に向上して、中国は内側から近代化されるにちがいありません。

現代に生きる孫文思想

さて、今年は、辛亥革命が成功した後、

年号が「中華民国」に改まって、ちょうど百年目に当たります。言葉を返せば、孫文が理想とした中国の未来へ向けて第一歩を踏み出したのが、まさに百年前だったのです。

そして百年後の今日、世界に追いつけ、追い越せとばかりに経済成長を目指してまい進してきた中国が、だれもが驚くような目覚ましい経済発展を達成しました。

しかし人々はハタと立ち止まって困惑しています。今後の進むべき道がよくわからないのです。だれも辿ったことのない未来が目の前に立ち塞がり、道はありません。社会主義でもなく、資本主義でもなく、これからのどのように道を切り開いて行くべきなのでしょう。だれもが思案している時代であって、進むべき道の選択肢のひとつとして、孫文思想がにわか注目をされています。孫文の掲げた「三民主義」を指針として、具体的基準を彼の著作「建国方略」に求めようという試みです。

中国ではもとより、アメリカでも今年初めに「孫文学会」が創立されました。学術研究とネットを通じた勉強会が中心ですが、その目的は、孫文の提唱した思想や活動を改めて詳しく研究して、未来の中国の国家方針となるべき重要なアイ

デアをまとめ上げ、国民全体に普及させようという動きです。

今日の日本では、世界的な経済不況に直面して失業者が増加し、経済格差がかつてないほど広がっています。「先のない時代」と表現されることもありま

す。しかし辛亥革命の時代にも、多くの人が「先のない時代」だと悲観していたのです。清朝政府の強権に虐げられた国民は、重税に息も絶えだえで、失業と貧困に泣きました。天災も次々に起こって極度の苦境に陥りました。

その中で、孫文が人々に与えた光明と希望は、現代の我々にも勇気を与え、大いに役立つヒントが山積みなのです。例えば、人々を鼓舞してやる気にさせる情熱的な話術。革命資金を世界中の華僑や外国人から調達する時の説得の方法。民主的な法制度を実施して合理的に取り組んだ「国家再建計画」……。

また、辛亥革命後に発生した失業者対策として実行した大規模な鉄道建設事業は、アメリカの経済不況時に実施された「ニュー・デール政策」にも匹敵するものですし、孫文亡き後、1930年代の「経済大恐慌」の時代に、中国の若手外交官たちは英仏両国と激しく渡り合っ



南京臨時参議院成立 下段中央が孫文

た国際通貨の為替交渉で、矛盾をはらむ国際金融の根幹問題にも触れて一步も譲りませんでした。「リーマン・ショック」以後の現在の世界経済が抱える難題をも暗示しているようです。

孫文がこれらの妙案を生み出した背景には、ハワイ育ちの朗らかな性格と、国際人・孫文の「天下は公の為に」という

無私精神、百年後の繁栄まで視野に入れた長期的視点、何事にも揺るがない不屈の精神力、そして確固とした理想と政治哲学など。そうしたものを孫文が備えていたからでしょう。そして当時、孫文が若い同志たちから慕われた最大の長所は、「嘘をつかない人」だという信頼感からでした。現代の政治家たちにも、大いに見習ってほしいことばかりです。最後にひとつ、孫文の口癖をお伝えしましょう。それは、

「志あれば、事は成る」——です。

孫文にとって、この言葉は信仰心にも似た固い信念になっていたのです。

(6月29日・講演会)

講師略歴(たん ろみ)

1950年 東京都生まれ
本籍は中国広東省高明県
父は中国人で母は日本人
慶応義塾大学文学部卒業
中国広東省の国立中山大学講師などを
経て独立 ノンフィクション作家
『日中百年の群像 革命いまだ成らず』
『中国共産党を作った13人』
『新華僑 老華僑』『阿片の中国史』
など著書多数